

ブリントの統計学理論について

有 田 正 三

1

ドイツ社会統計学の後期段階——後期ドイツ社会統計学¹⁾——は主としてフランクフルト学派とよばれる一団の統計学者によって担われる。この一団は、確率論的手続を中心として統計学を構成し、それを自然科学・社会科学に区別なく応用される普遍的方法論とする見解と対決して、社会科学的領域における統計学の独自性を主張し、確率論的手続には批判的態度をとり、社会現象を対象とする統計方法を独自の構造において構成することにつとめてきた。ジージュック (Franz Zizek) はこの学派の創始者と多くの論者によっていわれている。フランクフルト学派の確立と本格的展開は フラスケムパー (Paul Flaskämper) に負うところが多い。ブリント (Adolf Blind) は、この学派がそれまでに展開して来た理論を整理・総括するとともに、さらに独自の展開をおこなうことによって、フランクフルト学派の統計学理論の完成形態を示す。ハルトウィック (Heinrich Hartwig), メングス (Günter Menges), グローマン (Heinz Grohmann) たちの同学者または後継者はこの学派の理論的成果を補完し、あるいは、新しい展開を準備しつつあるようにおもわれる。

本稿ではブリントの統計学理論をとりあげる。筆者はかつてブリントの統計学理論に関する小論²⁾を公表したことがあるが、本稿はこれらを継承しつつ若干の掘り下げと補完によってブリントの統計学理論の特徴を一層明確にし、ひいてはフランクフルト学派の研究に資料を提供したいとおもう。

さて、ブリントの統計学関係の著作³⁾は多数あるが、とくに本稿は左記のものを参照した。論述に際し特殊な配慮を要するところを除いて個々に典拠を示す

ことをしないで、ここに一括表示することを許されたい (< >は略称を示す)。

(1) Einführung in die allgemeine Methodenlehre der sozialwissenschaftlichen Statistik. Skriptum nach der Vorlesung und weiteren Unterlagen. 2. verbesserte Aufl., Frankfurt (a. M.) 1970. 253 S. —〈Allgemeine Methodenlehre〉

(2) Bevölkerung- und Wirtschaftsstatistik. Skriptum nach der Vorlesung und weitem Unterlagen. Frankfurt (a. M.) 1969/70. 325 S. —〈Wirtschaftsst.〉

(3) Der Ganzheitscharakter der Volkswirtschaft und die Statistik. In: Beiträge zur Deutschen Statistik, hrsg. von P. Flaskämper und A. Blind, 1936, S.15-28. —〈Ganzheitscharakter〉

(4) Statistische Ursachenforschung. In: Die Statistik in Deutschland nach ihrem heutigen Stand. Ehrengabe für F. Zahn, hrsg. von F. Burgdörfer, 1. Bd., Leipzig 1940, S.53-63. —〈Ursachenforschung〉

(5) Probleme und Eigentümlichkeiten sozialstatistischer Erkenntnis. Allg. St. Arch., 37. Bd., 1953, S.301-313. (邦訳, 足利末男訳編『現代社会統計学』, 1967(昭和42)年, 三一書房刊, 61—80頁)—〈Probleme u. Eigentümlichkeiten〉

(6) Die zusammenfassende Kennzeichnung von Häufigkeitsverteilungen auf Grund quantitativer Merkmale in der sozialwissenschaftlichen Statistik. Allg. St. Arch., 46. Bd., 1962, S.217-236. —〈Häufigkeitsverteilung〉

(7) Einführung in die Wirtschaftsstatistik. In: Umriss einer Wirtschaftsstatistik, hrsg. von A. Blind, Hamburg 1966, S.1-24. (邦訳, 前掲足利記書, 177—204頁)—〈Einführung (Wirtschaftsst.)〉

プリントはその統計学理論の体系的叙述とみられる, 大学での講義テキスト(前掲(1))——以下においては『一般方法論』と略称する——やその他の論文において, 社会統計的認識の客体について論述し, これに認識目標を設定している。本稿はまずこれを出発点においてプリントの統計学理論に立入ることとする。

プリントは, 社会統計的認識の客体を社会的現実とし, あるいは, 社会的事実, 社会的出来事, 社会現象などとする。そしてその特質として, まず第一に, 歴史的性格をあげる。ここに歴史的性格とは, 客体が時間と空間に結びついた一回的なものだ, ということにほかならず, したがってこの性質を歴史的一回的性格ともよんでいる。歴史的性格は, 社会的現実が不断に変化する条件のも

とにあり、他の社会的事実と不断に変化する関係にあることを含意する。

社会的認識の客体の第二の特質は、社会的事実のそのときどきの形成が終局的には人間の価値観と目的に依存することであり、したがってこれらの意味関連のなかにおいて本質が見出されることである。以下においては「意味関連的性質」ということにする。

これら二つの性質は不可分の関係にある。これらが社会統計的認識の方法構造をいかに制約するか——ブリントのこのことに関する見解は叙述のなかで示すことにしたい。

ところで、ブリントは、別に、社会統計的認識の客体を集団現象 (Massenerscheinung) とする。集団現象は、「雑多な個別事例の一定数からなる総体」である。総体の大きさ (個別事例の数) も総体の構造 (個別事例の多様性から生ずる) も特別の手段を用いることなしには明らかにすることができない。統計は、構成要素である個別事例の観察を通じて——しかも個別事例のすべて、または、それらを代表するものを考慮することによって——これを実現する。そのために統計は集団現象の上に統計的集団を設定する。統計的集団は「同種であるが、しかし可変的な単位の総体」(Allgemeine Methodenlehre, S. 31.)⁴⁾である。

ブリントは社会統計的認識の客体については上記二種類の規定をおこなっているが、両者の関係については、ここでは立入らない。

さて、社会統計的認識の客体に対して、ブリントは二様の認識目標を設定する。「統計記述」(statistische Deskription) と「統計分析」(statistische Analyse)、これである⁵⁾。以下においては、節を分けて、両者を詳述し、これらに対応する方法的操作を問題にしよう。

- 1) 拙著『社会統計学研究』, 1963 (昭和38) 年, ミネルヴァ書房刊, 18—22頁, 参照。
- 2) 拙稿『社会統計的認識の問題と特質』, 彦根論叢第43号, 1958 (昭和33) 年; 『社会統計的認識の特質について—再びブリント教授の見解について』, 彦根論叢第134・135号, 1969 (昭和44) 年; 『ブリントの統計的集団論について』, 彦根論叢第181号, 1976 (昭和51) 年。
- 3) ブリントの著作目録は近刊予定の有田=足利訳編『フランクフルト学派の統計

学』所収の同学派著作目録を参照。

- 4) プリントの統計的集団の概念については前掲拙稿参照。
- 5) プリントにおいては「記述」と「分析」は統計的認識の継起的段階をなすものではない。統計的認識の段階は、『一般方法論』では、「調査」(Erhebung)、「整理」(Aufbereitung) および「利用」(Auswertung) とされている (Allgemeine Methodenlehre, S. 6.)。

2

初めに統計記述をとりあげよう。

統計記述は、現実事態の純粹記述、および、これを利用しながらこれを越えた、社会的事実の立入った解釈からなる。

純粹記述を内容的にみると、集団の大きさと構造の確定、単位の量的標識和と平均的大きさの算出、比較、比率の算出、代表値その他の測度による度数分布の特徴づけ、時系列の経過の特徴づけ、などをいう。現実事態の純然たる描写であり、単なる記述である。

純粹記述の基礎は統計調査によって与えられる。

統計調査においては、ジージェックのいうように、概念を通して現実事態が捕捉される。¹⁾統計的概念にほかならない。さて、自然科学的統計では対象から出発し普遍化的方法によって構成された一般概念がそのまま用いられるが、社会統計では事態が根本的に相異なる。社会科学的概念は統計的概念として用をなさない。それは、具体的な個別事例から即物的にではなくして、意味関連にもとづく思考上の表象を基礎にして理念型的に構成されたものであるから——。統計的概念は、これとは反対に、即物的に、集団およびその部分集団を構成する個別事例に具わる客観的性質にもとづいて構成されなければならない。しかもこの客観的性質は容易に、速やかに、一義的に個別事例において確認することができる、外に現れる性質でなければならない。『一般方法論』はこれを²⁾経験的類概念 (empirischer Gattungsbegriff) とする (Allgemeine Methodenlehre,

S. 15)。こうして社会科学的概念と統計的概念との間には大きな間隙が存在することとなる。³⁾

社会科学的概念——あるいは社会的事実——と統計的概念との不一致はすでにフラスケムパーによって明らかに意識されていた。ブリントはこれを一層明確にとらえ、矛盾の両極を理念型概念と経験的類概念として規定を厳密化する。⁴⁾

社会科学的概念と統計的概念との間の間隙は、社会科学の要請に合致する統計的結果を得ることが不可能であることを教えるものである。ただしこのことは社会科学の要求に合致する統計的結果を得るための努力を嘲笑するものではなく、反対に統計的概念を社会科学的概念に出来るだけ照応するように構成することを要求するものである。ちなみに、両概念間の間隙を明確に解明した1953年のドイツ統計学会におけるブリントの講演『問題と特質』(Probleme u. Eigentümlichkeiten) についての討論においてハルトウィックは「調整」(Adäquation) という概念を提示し、調整理論の展開を社会統計学の独自の課題とした。⁵⁾ 以後ブリントはハルトウィックの概念を用いる。メンゲスはブリントの見解を一層具体化し、調整の具体的手続を規定した。⁶⁾

社会科学的概念と統計的概念との不一致から生ずる、社会学者が本来求めている社会認識と統計の結果との不一致——メンゲスのいう「調整誤差」(Adäquationsfehler) ——を事物的考察と補足的な推察によって推定することは可能であるが、大きさを数量的に正確に確定することはできない。⁷⁾

統計調査結果は社会的認識としては他に多くの問題をもつ。ブリントは対象把握の少数標識への限定、および、個別事例の個性の無視をあげる。「統計データは現実の完全かつ本質的な叙述ではなくして、徴候の様式化を提示するにすぎない」(Wirtschaftsstatistik, S. 87.)。『一般方法論』も統計的結果を「様式化された記述」という語で特徴づけている (Allgemeine Methodenlehre, S. 55.)。統計的結果は、さらに、さまざまな誤差を身にまとっている。

しかしブリントが最も強く強調することは統計的認識が量的認識であることから来る、社会的認識としての不十分性であろう。おもうに、社会的事実はい「量と質との結合」からなる (Allgemeine Methodenlehre, S. 46.)。この命題はす

でにフレームメーカーがいくたびか強調したものである。自然現象では質が終局的には量に還元されるが、社会現象ではそうでなく、量に還元されえない質が残る。まさに、社会現象は質と量の結合からなりたっており、量的側面しか語らない統計は社会認識としては一面的なものである。

そればかりではない。社会現象の質、とくにその本質は意味関連のなかにある。社会現象を把握する上で重要なことは、一定の価値観と目的が人間行為の起点ともなり背景ともなっていることであり、しかも価値観と目的が時の経過のなかで変転することである。統計は社会的事実が意味関連においてもつ本質をとらえることができず、調整を通じて外的形式的に接近することがせいぜい⁸⁾のところであるから、社会的認識の最終的形態ではないのである。

このようにして、プリントは、統計の社会的認識としての不十分性を指摘したのち、統計記述が社会的現実により深く立ち入ったものとなるためには、質的な契機をふくんだ統計以外の知識や資料を用いて統計の結果を解明し補完すること、さらに、社会的事実の根底にある人間の価値観および目的にまでさかのぼり、これをよりどころにして「了解的解釈」(verstehende Deutung)をおこなわなければならないこと、を主張する。ここに了解的解釈とは、統計的結果の「事物的連関におけるの評価と妥当する価値観および目的観念との関係におけるの批判的考察」(Allgemeine Methodenlehre, S. 55.)である。これによって統計的結果の数量的規定性が広範に犠牲にされるかもしれないが、それはやむ⁹⁾をえない。統計記述は了解的解釈によって「了解的記述」となる。

プリントは、量的標識にもとづく度数分布の総括的特徴づけを了解的解釈に関連づけながら説明しているので(Häufigkeitsverteilung, S. 232.)、これを参考にして了解的解釈の概念の理解を深めたい。

度数分布の総括的特徴づけは、二つの相異なる目標設定のもとでおこなわれる。一つは、実体的な経済的社会的に有意義な情報を得る了解的解釈として、いま一つは、度数分布の背後にある分布法則を推定することを課題として。

了解的解釈としての度数分布の総括的特徴づけは、経験的に与えられた度数分布を、推定されるべき分布法則の偶然標本とみるようなことをせず、独自の

ものとしてとらえ、その歴史的・一回性を念頭におきながら、とくに系列形態を問題にする。系列形態とは、一定の秩序で継起する群の強さの關係にほかならない。系列形態の全体に関心がむけられる場合と或る部分への度数の集中や或る階級から他の階級への度数の変動が関心の対象となる場合があるが、いずれにしる系列形態を事物的に考察解釈するときには、次のことが配慮されなければならない。それは度数分布の基礎をなす量的標識についてである。先ず例示的説明から始めよう。人口の年齢構成が経済的社会的な意義をもつのは、住民の年齢、すなわち、「この世をいきぬいてきた年月」による区別からではなく、年齢を異にすることによる、外貌、身体的状況、生物的増殖力、生活体験、労働能力または扶養の必要性、所得または消費などにおける区別からであり、これらの区別が年齢を指標としてただ近似的に判断されるのである。しかも年齢区分に対応する経済的社会的に有意義な性質は年の経過とともに変化するし、国を異にすれば相異なる。こうして量的標識は「直接的認識の欠如」のなかで実体的なものの徴候的な意義をもつのである（Häufigkeitsverteilung, S. 220.）。

さて、この様なことの配慮を前提した上で、度数分布の総括的特徴づけにあたっては、系列形態を実質的に有意義に特徴づける測度数が求められる。それは実在的な数値であって、度数分布の全体に対して具象的關係をもつものが適している。中位数、四分位数、六分位数、最頻値、釣鐘状分布曲線の変曲点、あるいは、境界値（Scheidewert）、最重値（schwerster Wert）など、これである。とくに中位数と最頻値が重要であり、また、事情によってこれを補完するために散布度が考慮されなければならない。経験的度数分布の基礎をなすと想定される分布法則の推定にあたって重視される算術平均は、この場合、意義が少い。計算的抽象＝補償値としても分布形態について何も語るところがないから——。中位数・最頻値の代用として僅かに意味をもつにすぎない。

以上、要するに度数分布の総括的特徴づけは、了解的解釈を目標とする場合には、中位数や最頻値などの事物的に有意義な位置の代表値その他の獲得という形式的方法操作、および、これによってえられる結果の了解的解釈から形成される。上記の形式的・方法的操作は現実事態の事物的連関を基礎として行なわ

れ（「事物論理と数論理の平行」）、了解的解釈と根拠を同じうする。了解的解釈がやがて記述を支配する。了解的解釈を「度数分布の総括的特徴づけ」の目標として規定するするとき（Allgemeine Methodenlehre, S.190.）、プリントは、統計記述を「了解的記述」と観念していたにちがいない。さきに統計記述は「了解的記述」となるといった所以である。

- 1) F. Zizek: Fünf Hauptprobleme der statistischen Methodenlehre, München u. Leipzig 1923, S. 9.
- 2) プリントは、統計的概念について、「時には自然科学的概念構成に似た定義を必要とすることがある」、ともいつている（Probleme u. Eigentümlichkeiten, S. 303. 訳64頁）。
- 3) プリントはいつている——「統計記述における最初の困難は、専門科学的概念が意味関連から展開されるが、統計学者は、容易に認識することができ、個々の場合に速やかにしかも一義的に確定できる標識によって規定されている類概念で操作しなければならない、ということから生ずる」（Einführung (Wirtschaftsst.), S. 3. 訳180頁）。
- 4) P. Flaskämper: Die Bedeutung der Zahl für die Sozialwissenschaften, Allg. St. Arch., 23. Bd., 1933-34.
- 5) H. Hartwig: Diskussionsbeitrag zum Vortrag von A. Blind: Probleme und Eigentümlichkeiten sozialstatistischer Erkenntnis. Allg. St. Arch., 37. Bd., 1953, S. 337.（邦訳、足利末男訳『現代社会統計学』, 1967（昭和42）年、三一書房刊, 89頁）。なお、ハルトウィックは1956年に調整概念の明確な規定を下記論文において与えた。Naturwissenschaftliche und sozialwissenschaftliche Statistik. Zeitschr. f. d. g. Staatswiss., 112. Bd., 1956, S. 252-266.（足利末男訳『自然科学的統計学と社会科学的統計学』, 同編訳, 前掲書所収）。なお、拙稿『社会統計学の特質と課題——ハルトウィックの見解について』, 彦根論叢, 第119・120号, 1966（昭和41）年, 参照。
- 6) G. Menges: Methoden und Probleme der deutschen Fremdenverkehrsstatistik. (Beiträge zur Fremdenverkehrsforschung. Schriftenreihe des Institut für Fremdenverkehrswissenschaft 3.) Frankfurt a.M. 1955, S. 184-195. なお、拙稿『社会科学的概念と統計的概念』, 彦根論叢, 第126・127号, 1967（昭和42）年, 参照。
- 7) Menges: Die Statistik. Zwölf Stationen des statistischen Arbeitens. Wiesbaden 1982, S. 446.
- 8) プリントは既に初期の論文において、国民経済の全体的有機体性格を前提して

「この構成体に対する 統計的結果の根本的な意義に関しては——プラスチックムパーがかつて述べたように——統計数は背後にある事物的連関へ掘り下げることによって始めて意味と魂を保持するという、「質的な、それ以上は分解されえない力と所与の認識との結びつきによって始めて、それ自体においては量化されえない国民経済的有機体の完全な像がえられる、ということ」を強調している (Ganzheitscharakter, S. 17.)。

- 9) プリントは、後述するように、統計分析が了解的解釈を介して「了解的分析」(verstehende Analyse) となる、といっている。統計記述を了解的記述とすることは誤ったプリント解釈であろうか。

3

統計分析は規則性、依存・制約関係および法則性の認識である。プリントによれば、統計分析は、現在の状態を規定する影響要因を明らかにすることに限定されないで、過去の発展を解明し、将来において作用する要因を明らかにして、予測の道を用意するものである。

ドイツ社会統計学では、通例、規則性および法則性が現象のなかに見出される定型および定型的関連としてとらえられるが、それらは、さらに、現象の基礎に存在する一般的条件の作用結果または実現とされ、一般的条件に関心がむけられる。ただし、一般的条件そのものを統計で把えることは不可能であるから、その作用結果と通じて一般的条件を把えることとなる。そしてこの方向において一般的条件への接近を可能にするものは大数法則である。

大数法則に関しては、現象の背後に一般的原因と偶然的原因からなる独自の原因機構が仮定される。一般的原因は現象のすべての個別事例に共通的に妥当する基礎的な条件であり、偶然的原因は個々の個別事例に特殊に作用する要因である。さて、大数においては偶然的要因の作用が相殺され、一般的原因だけが作用したならば現れるであろうところの結果——いわゆる「本質形式」——がとらえられる。

こうして大数の観察によって一般的原因の、いはば純粋培養結果がえられる

としても、この結果が時間的場所的に安定性を示すとはかぎらない。安定性も一つの定型であるが、定型には他にさまざまな種類があるし、さらに定型を示さない場合もある。こうして定型の有無、および、定型の種類の設定は観察結果の比較を通じて始めて可能となる。

以上、規則性および法則性の設定には大数観察と観察結果の比較が重要な役割を演ずるが、社会現象が対象となるときには様々な問題が生ずる。

まず第一に大数法則の社会現象への適用の可能性についてである。プリントはフラスケムパー¹⁾とともに大数法則の有効性を統計的集団が本質同等性 (Wesensgleichheit) をそなえる場合に限定する。ここに本質同等性とは、集団が統一的な原因複合をもつことをいう。それは、集団の構成要素が現象をひきおこし、あるいは、規定制約することにおいて同等の性質をもつことにほかならない。自然科学では、実験によって、現象を同一条件のもとで生起させることによって、観察事例の本質同等性を確保することができるけれども、社会現象については事態が根本的に相異なる。実験は不可能である。与えられた経験的現実においては——たとえば一国の人口は、男女別構成、年齢構成、職業構成など、それぞれ死亡率に相異った影響をおよぼす部分集団からの構成——しかも相異なる種類の構成の幾重もの積み重ねから形成されている。本質同等性は現象を規定する要因（たとえば死亡については性別・年齢・職業など）を標識とする重層的な集団分割を要求するが、実際には実現されえない。

では本質同等性を欠く集団に対する統計的結果はいかなる性格をもつか。それは、統一的な原因複合をもつ部分集団における現象の数値の合成として現れる。しかもこの場合、ここでいう「数値の合成」には、これら部分集団の集団における比重——「混成関係」——が参加して、結果を左右する。

なお、敢えて附言するに、大数法則の適用条件についてジージェックとフラスケムパーとは見解を異にし、1929年から30年にかけて両者の間に論争がおこなわれた。²⁾ジージェックは本質同等性を要求しない。観察事例の数が多ければよい、というわけである。ただし本質同等性を欠く集団に対する結果は統一的な原因複合をもつ部分集団からの集団の混成関係の影響をうけるゆえ、これを

排除するために因果的要因による集団分割を要求する。³⁾ プリントは両者の見解が統計的原因研究においてはたがいに⁴⁾ 接近すると見る (Ursachenforschung, S. 57.)。

次に、因果関係の統計的証明についても大きな困難がつきまとう。因果関係の統計的証明は、ある現象に対して因果的要因であることを証明されるべき契機を標識として集団を分割し、部分集団について算出される現象の数値(強度など)を比較して本質的な差異があれば、分割標識と現象との因果関係を推定する。この手続は因果的要因の孤立化を要件とする。因果的要因の孤立化とは、因果的要因であることが証明されるべき契機をのぞく他のすべての因果的要因について集団の構成要素が同等であることをいう。このことをプリントは分割標識における相異をのぞいた本質同等性とみる。因果関係の統計的証明は分割標識において相異なる二つの原因複合の比較である。両原因複合のなかに他の因果的要因についての相異がさらに存在するならば、比較結果たる数値の相異を分割標識における相異に還元することが許されない。因果的要因の孤立化は現象に作用するすべての要因による集団の重層的分割を必要とし、現実には達成が著しく困難である。

もっとも、因果関係の統計的証明には好都合なことがある。分割標識をのぞいた本質同等性は無条件には必要でない。比較される集団が現象に関して統一的原因複合をもつ部分集団から同じ仕方で構成されているならば、それでよい。因果関係の統計的証明には、統一的原因複合の表現である統計的結果の獲得よりも若干明るい展望が開けているのである。しかしながら、なお次のような⁵⁾ 根本的な問題があることを見逃すことが出来ない。

第一に、社会現象では、因果的要因は自然現象におけるようなつねに一定した必然的合法的な作用をしない。たとえば賃金に対する経験年数の影響という場合、そこには経験年数の多い者および少ない者に対する仕事上の評価が介入しており、しかもこの評価は可変的である。技術革新の進展のなかで、経験年数が多い熟練度の高い労働者に対する評価が低下し、年功賃金制度の清算すら要求されるにいたる。同様のことが多くの社会的依存関係に対してあてはまる。

因果的要因の作用は不変の自然法則ではなくして、人間の社会の変動する価値観に依存しており、必然的に、しかも同一には作用しないのである。

第二に、統計によって経験的に確定される法則性は、現実の因果関係を徴候的に特徴づけるものにすぎない。たとえば職業が死亡率を左右する因果的要因であるといっても、それは職業そのものにとどまらず、職業に必然的に伴われる労働、職業に従事する者の生活態度や生活慣習、所得、社会的地位、職業病、その他が全体として死亡率を規定しているのであって、職業はこの原因複合を徴候的に特徴づけているのである。この意味においてこれを手掛として、それが徴候的に代表する原因複合の実体的説明がなされなければならない。

最後に、社会的依存関係における要因は、人間の価値観や目的によって規定されており、さらに、多数の要因が結合したがい依存しあい、全体として現象を規定しているのであるから、ここでは原因 (Ursache) ではなくして根拠 (Grund) が問題である。しかも個々の根拠の重みを背後にある可変的な価値観や目的を考慮しながら概観し見積るべきである。プリントはこれを「根拠づけ関係の説明」(Aufklärung von Begründungszusammenhängen) とよび、「原因研究」(Ursachenforschung) という称呼を断念する (Einführung (Wirtschaftsst.), S.7.: Allgemeine Methodenlehre, S.56.)。こうして統計分析は了解的解釈によって「了解的分析」(verstehende Analyse) となる。それは、「究極的には人間の考え、価値判断、規範および目的の全体系に帰せられる」経済的および社会的出来事の説明根拠を求めて、客観的認識を主観的判断によって補うことをも必要とする。いかにはげしくこの必然性を残念に思おうとも――。

分析は予測に基礎を与える。社会現象においては、自然科学の実験のように人間の管理下において観察することができる自然現象とは異なり、とくに統一的原因複合がえられず、しかも原因複合が不断に変化するから、予測は、特殊な場合を除いて、確率論的手法にはよらないで、一般の蓋然論理にしたがって、影響要因の配置および現象の発展の事物的内容的な把握にもとづいておこなわれる。「現象に対する影響要因について、一方ではより重要なもの、他方ではより重要でないもの、ただちに作用するもの、比較的長期にわたって作用

するもの、その作用において判断の比較的容易なものと同難なものが区別される。その将来の推定される形態については、またもや、内容の考察によって支えられた、できるかぎり現実的な仮定を立て、こうして近い将来について暫定的な判断に到達することができる」(Einführung (Wirtschaftsst.), S.9. 訳186頁)。

社会統計における統計的推論は、対象に却した推論の矛盾なき多段的総合的な体系の構成であり、确实性に近い内的蓋然性 (innere Wahrscheinlichkeit) を志向する。それは数量的には規定されえない。日常生活における蓋然判断と同様に確率論的手法におけるよりも一般的である。

以上、二つの認識目標として記述と分析を区別して論じてきたが、両者は論理的にのみ異なっているにすぎず、実際にはからみあっていることを留意しなければならない。たとえば因果関係の証明のための、因果的要因による集団分割を見よ。

- 1) Flaskämper: Das Problem der „Gleichartigkeit“ in der Statistik. Allg. St. Arch., 18, Bd., 1929, S.219.
- 2) ジージェックとフラスケムパーとの論争は1920年代後半から30年代前半において多くの論者が参加しておこなわれた、いわゆる同種性 (Gleichartigkeit) 論争の一環を形成する。
- 3) F. Zizek: Gleichartigkeit, Homogenität und Gleichwertigkeit in der Statistik, Allg. St. Arch., 18, Bd., 1929, S.395-39.; Der Begriff der Gleichartigkeit in der Statistik, Allg. St. Arch., 20, Bd., 1930, S.13-22.
- 4) ジージェックもフラスケムパーも、ともに、因果的要因による集団の重層的分割を通じて、出来るだけ集団混成の影響から免れた、したがって、出来るだけ統一的な原因複合をもつ部分集団の数値の獲得をすすめると、ブリントは判断する (Ursachenforschung, S. 58.)。
- 5) ブリントは問題点として次にあげる諸点のほかに、統計においては二つの事実の一致または共存を確認することが出来るけれども、いずれが原因であり結果であるか、を明らかにすることが出来ないことをあげている (Ursachenforschung, S. 62.)。

4

ブリントの統計学理論は、フランクフルト学派のこれまでの理論的展開の整理・総括であるとともに、新しい理論的展開をふくんでいる。

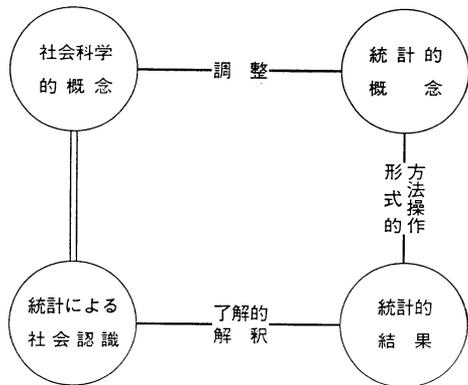
フランクフルト学派においては、フラスケムパーの「認識目標の二元論」によって定式化された二種類の認識目標のうちの、ストカスティックの方向が社会統計的認識の実際の方法構成においては疎外され、記述の方向が優越的支配的な役割を果す。とくに本来的にはストカティックの方向にある一連の数理的解析手続も、確率論的性格を換骨奪胎されて、記述的性格において利用される。これらの展開は社会現象を価値または人間の目的との意味関連においてとらえる、社会科学の精神科学的または文化科学的解釈との結びつきのなかでおこなわれた。とくにリッケルトあるいはウェーバーなどの新カント派哲学との関係が深い。ブリントはウェーバーに依拠するところが大きいと判断される。

おもうに、新カント派哲学と統計学との関係はフランクフルト学派の成立以前にも早くから存在し、新カント派的観点において社会統計的認識の方法的構造や統計学の学問的性格を問題にする試みがなされている。たとえばチュプロフ (A. A. Tschuprow) やヴァッセルマン (R. Wassermann), さらに、フラスケムパーにやや先行し、その主著についてフラスケムパーが詳細な書評を書いているヴォルフ (H. Wolff) などはその主なものである¹⁾。ところで、フランクフルト学派の新カント派との結びつきは、これらの論者とは異なる独自の性格をもつ。たとえば、リッケルトの「相対個性」(relativ Individuelle) の概念を用いて社会統計的認識の論理的性格を明らかにしようとするヴァッセルマンから²⁾すれば、統計的概念は意味関連のなかにおいて構成されるべきものであった。フランクフルト学派は、ブリントにおいて明確に規定されているように、社会科学的概念の意味関連的性格を強調するが、統計的概念については反対に経験的類概念としての構成を主張する。一方では社会的事実および社会科学的概念

の意味関連の本質、他方では統計方法の類的把握(「自然科学」的方法による把握)としての性格、この両者をそれぞれそのままにしておいて接合しようとするのである。

接合は、いわば全く異質のものとの結合であり、それゆえに必要視されたものが第一に調整であり、第二に了解的解釈であった。調整は、既述のように、フラスケムパーによって提起され、ブリント、ハルトウィック、メンゲスによって概念的定式化がなされるとともに、調整理論が展開され、いまやそれらはフラクフルト学派の財産ともなっている。了解的解釈はすぐれてブリント独自の成果である。統計の結果が社会的認識としては一面的であり、外的形式的なものでしかないから、社会的現実の本質に接近した社会的認識とするためには了解的解釈が必要だ、というわけである。

ブリントの方法論的展開を最近しばしば論者によって利用されるシェッファ(Karl-August Schäffer)³⁾の図にならって別図のように図示すると、理解が容易になる。



社会統計的認識の方法的過程

展開は、四つの理論的結節と三つの媒介項からなる。理論的結節は、(1)社会科学的概念、(2)統計的概念、(3)統計的結果、(4)統計による社会認識、であり、媒介項は、調整<(1)から(2)へ>・形式的方法操作<(2)から(3)へ>・了解的解釈<(3)から(4)へ>、である。既述のように、社会科学的概念と統計的概念とは対抗的であり、調整が必然化されるし、統計的結果と統計による社会認識との間にも同様の間隙があり、了解的解釈が必要となる。調整と了解的解釈とは同じ根拠によって問題になり、反対の方向をとる。調整があるがゆえに了解的解釈が必然化される。社会科学的概念と統計による社会認識は理論的なものと現実的なものとの関係において照応しなければなら

ない。こうして一つの円環⁴⁾が形成される。

このように見てくると、統計記述および統計分析のなかに調整と了解的解釈が組みこまれることによって、社会統計的認識の一元的な方法体系が完成することとなる。このことによってプリントはフランクフルト学派の完成形態を代表するのである。

- 1) A. A. Tschuprow: Statistik als Wissenschaft. Arch. f. Sozialwiss. u. Sozialpol., 23. Bd. (N. F. 5. Bd.), 1906, S. 647-711.; R. Wassermann, Begriff und Grenzen der Kriminalstatistik. Eine logische Untersuchung. (Kritische Beiträge zur Strafrechtsreform. Hrsg. von K. Birkmeyer u. J. Nagler, Ht. 8.) Leipzig 1909. 112 S.; H. Wolff: Theoretische Statistik. (Grundrisse zum Studium der Nationalökonomie. Hrsg. von K. Diel u. P. Mombert. 20. Bd.) Jena 1926, 453 S.
- 2) R. Wassermann: a. a. O., S. 48-58. なお、チュプロフおよびヴァッセルマンは、統計学を「相対個性の学」として構想し、「統計的方法」(statistische Methode)—確率論的手続—は自然科学的方法であって「統計学の方法」とはなりえないとする。(Tschuprow: a. a. O., S. 703.; Wassermann, a. a. O., S. 88.)
- 3) Karl-Augst Schäffer: Zur Entwicklung der statistischen Methodik, Allg. St. Arch., 64. Bd., 1980, S. 2.
- 4) 上記の円環は、社会科学的概念を起点とし、結局はそれへ復帰する円環である。実をいうと、この円環の外に社会的現実がある。社会現象の本質を意味関連のなかに見る立場に立つときには、社会現象は社会科学的概念と重なり合い問題はないけれども、社会現象の本質を社会そのもののなかを求めるときには、円環の外にある社会的現実には、独自の存在を主張するだけでなく、円環そのものに反抗する、と考えられるが、ここではこのことを暗示するにとどめて、具体的展開は他日に期したい。